

1. 緒言

明朝体とは、縦画が太く横画は細く、折れるところや止めに飾りがついている書体である。これは草書体の諸要素を活字として彫刻しやすくするために単純化・標準化した形であるが、この特徴は漢字のみにあてはまるものであり、ひらがなは同じ明朝体の中でも同様の純化がなされていない。なぜこのような差が生じたのか。その理由は、日本に明治初期に活版印刷技術とともに中国から持ち込まれたが、日本特有の文字であるひらがなの活字が存在しなかったことにある。このため、ひらがなは漢字と同様の純化を経ることなく草書体のまま活字化され、明朝体という一つの書体の中には直線的な漢字と丸みのあるひらがなが混在する結果になっているのである。そこで、漢字と同様に純化されたひらがなの明朝体を制作することで、統一感のある明朝体書体を完成させ、その新たな明朝体の性質に適した用途や使用方法を考察する。

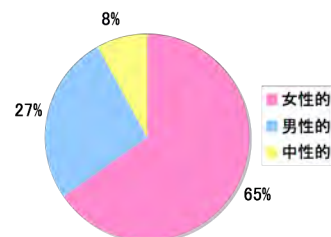
2. 研究のアプローチ

ひらがなの明朝体の制作は、大きく分けて次の3つの行程を経て行った。1. いり、とめ、はね、はらいなどの要素を漢字にならって純化する。2. ひらがなの形に合わせた曲線を加えて柔らかみのあるスタイルにする。3. 斜めの画やしなりを加えてしなやかな印象をつくる。4. 実際に文章を組み、仮想ボディに対する字面の大きさや構成要素の位置、大きさ、形状を調整する。

また、諸要素の純化については、1. 縦画は太く、横画は細くする。2. 横線の右端、曲り角の右肩にウロコをつける。3. 止め、はね、はらいの部分は筆書の字形を踏襲する。という3つのルールに従って行った。フォントのグリフはアドビシステムズの Adobe Illustrator で編集し、株式会社武蔵野システムの OTEdit を使用して PostScript 形式の OpenType フォントとした。従って、コンピュータ画面に表示し、DTP ソフトなどを利用して紙面に印刷することが可能となった。完成したフォントには「ひらみん」という名称をつけた。

3. 結果

完成した「ひらみん」が与える印象を調査するために、75人の男女を対象にアンケート調査を実施した。全8問で全体的な印象を確認した。調査結果(抜粋)は以下の通りである。



アンケート調査の結果により、「ひらみん」は見る人に女性的、伝統的、優雅、大人っぽい、柔らかい、明るいといった印象を与える傾向が強く、短い文章に向いているということが分かった。

4. 結論

従来の明朝体は優雅で繊細な印象を与えることが多く、短い文章よりも長い文章に適していたのに対し、「ひらみん」は従来の明朝体の性質を受け継ぎながらもタイトルや見出しなどの短い文章に向いている。つまり「ひらみん」は、明朝体がこれまで活躍できなかった用途において、その印象を役立たせることを可能にした書体であるといえる。

ゑ ひ も せ す
あ さ き ゆ め み し
け ふ こ へ て
う の お く や ま
つ ね な ら む
わ か よ た れ そ
ち り ぬ る を
い ろ は に ほ へ と

5. 今後の発展

更なる改善のためには、第三者に「ひらみん」を配布して実際にデザイン制作で使用してもらい、不自然な点などの意見を調査することが望まれる。また、文章の役割や文字サイズに即した細かな需要に応えるためには、ウェイトをより豊富に展開することが課題である。今後「ひらみん」が広告物や書籍などに利用されることにより、従来は明朝体とその性質を活かしきれなかった用途において、その魅力がデザイン表現の一翼を担うようになることが期待できる。

文献

- [1] 祖父江慎, 『文字のデザイン・書体のフシギ』, pp.35-87, 5月2008年(May.2008)